

『明治時代??』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

5年前の話である。拙院より千葉県・亀田総合病院に国内留学を果たした平成生まれの臨床検査技師が、入院病棟で「明治時代」生まれの人達に初めて出会ったという事を、私に興奮しつつ話してくれた。

確かに、その頃は、明治生れの方々が100歳を超えた時点であった。そこで、超高齢者が介護老人保健施設や特別養護老人ホーム、サービスタ付き高齢者向け住宅、在宅診療などの介護現場ではなく、疾患を積極的に治療すべく急性期病床ユニットで診療が施されていた模様が、昭和生まれの祖父、両親に育てられた人間にとって衝撃であったわけだ。

その際、昭和33年生まれの小生は、彼のビックリする姿が理解出来なかった。なぜならば、私の医師駆け出し時代には、接する患者さんの多くが明治や大正生まれであった。そして、まずもって「明治時代」という単語に違和感を抱いた。

小生が37歳まで一緒に暮らした祖母は明治生まれ、5年前に亡くなった父は大正生まれであった。よって明治も大正も身近な存在であったわけだ。

確かに、明治以前の元号である江戸ともなれば、侍の格好や鬘、刀など時

代劇のイメージであり、江戸は東京都の旧姓である。よって「江戸時代」には馴染みを持つものの、明治は明治、大正は大正であり、「明治時代」、「大正時代」とは呼称しない。

そこで来年1月に還暦を迎える小生は、天皇陛下の御意向が叶ったところで、昭和と平成を、ほぼ同じ時間を生きたことになるわけだが、多感な青春を過ごした昭和が、そのうちに「昭和時代」と呼ばれるのも寂しい感がある。

いつの間にか、銀行書類などの誕生日を記入する「M・T・S」のチェック項目が、「T・S・H」に置き換わり、生誕年齢や時代を表現する際、文語も口語も西暦表示に変わってきた。それは実際のなことであろうが、100歳超の元氣なお年寄りもいらっしやる限り、元号も重視し、Mの表示を消失させるべきではない。

次には、向島の馴染みの料亭。昭和生まれ三代目女将から聞かされた話。

彼女が実際に見た光景ではないが、明治生まれの祖母の時代は、江戸の名残として、酔客は三味線や太鼓の伴奏で小唄をお披露目していたという。そして昭和初期生まれの母親時代は、宴の最後は軍歌の合唱が常であったと聞

く。

カラオケもギター演奏の流しも無かった時代には、昔の人の粋や、想像のつかない絆が存在していたのである。確かに、小生が同年代の仲間と座敷を共にする際、皆で「昭和のヒットパレード」を熱唱するが、それらの流行歌も、いずれは消滅していくのである。こちら

だ。いつの時代、いずれの国に生まれるかは、人の運命を決定づけるところであるが、日本人は皇室が存在する限り、天皇家を敬い、自分が生きる元号に縁を感じるべきであろう。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院www.ito-hospital.jp 大須診療所(名古屋分院)www.osu-shinryoujyo.jp

